

検証 JR革マル浸透と組織私物化の実態！

民主化闘争情報[号外] 2009年11月18日 発行 日本鉄道労働組合連合会(JR連合)【No.66】

革マル色払拭に躍起の松崎氏の主張に説得力なし！

革マル派「綾瀬アジト」からの押収物の解析資料の、東労組元会長の松崎氏に関する記述はさらに続く（宗形明著「異形の労働組合指導者『松崎明』の誤算と蹉跌」p.60～）

松崎明について

松崎明は、革マル派結成当時の副議長（「倉川篤」のペンネームを使用）で、自らも「革マル派を作った一人」、「かつては革マル派の幹部であった」と自認しながらも、「もうすでに辞めた。今は革マル派とは関係ない」と、あらゆる機会を捉えて同派との無関係を強調し、「単なる労働組合の幹部である」と公言しながら、自民党議員等と積極的に接触するなど、革マル色の払拭に躍起となっていた。

松崎は革マル派幹部の学習会に出席し、党建設の方針等について講演や指導を行っているほか、参加者にレポートを提出させ、それにコメントを付すなどして、同盟員を厳しく指導しており、また、松崎の講演や論文は、「同盟員の必読学習資料」的な位置づけにあり、これを基に各種学習会や会議等で検討や討議をしている。

松崎は、平成5年の沖縄県委員会での分派活動により、中央指導部にまで波及した「組織混乱」の收拾と、「組織の再建」に乗り出し、指導部幹部（JR出身の中央労働者組織委員会常任委員等）を権利停止処分にしたほか、新たな下部組織を作ったり、機関紙「解放」の購読やカンパの納入を停止した一部指導者に対して、「機関紙の再購読とカンパの納入」を命令して実行させるなど、絶対的権限を行使しており、自らが先頭に立って、党建設に取り組んでいる。

なお、上記の「組織混乱」とは、先に検証した動労第4代青年部長の上野孝氏が革マル派に拉致・監禁され客死したあたりのことを指していると思われる（No.25,26参照）。

裁判所も松崎氏の主張の矛盾を指摘！

松崎氏は革マル派との無関係を強調するが、2009年10月26日の「週刊現代裁判」の一審判決が「昭和61年のインタビューの際には、動労が貨物安定宣言を出した昭和53年10月以前に革マル派との関係が切れていたと語ったものの、平成4年発行の著書において、昭和53年に上記宣言が行われたときにはまだ革マル派だったと思うとの記載をし、平成6年のインタビューにおいて、何年に革マル派を辞めたかは、わからないと答えるなど、革マル派を辞めた時期について矛盾するともとれる発言をしている」と判示したように、主張は一貫性がなく説得力もない。本人が何と言おうと、検証すればするほど、警察が革マル派最高幹部と断じる松崎氏について、「革マル派をいつ辞めたのか」という疑問自体が無意味に思えてくる。

また、「自民党議員等と積極的に接触」とあるが、政権交代後の現在、民主党議員に触手を伸ばしている危険もありそうだ。また、上記のように、松崎氏のペンネームが「倉川篤」であることは有名だが、息子の名前も「篤」であることも興味深い。

JR総連・東労組は、この綾瀬アジト解析資料の内容は間違いだとしているが、警察が作成したか、警察情報に基づく資料であることは認めている。警察の言うことは全部デタラメとする彼らの主張は主張で結構だが、一般の組合員には到底通用しないだろう。